日本文化の支那に及ぼせる影響

文學博士　服部宇之吉

私にも今夕何か話をするやうにと云ふ御依頼でございましたが、唯今の松村博士のお話と丁度反對の向のことをお話するやうに偶然なりました。題目が大うございまして内容は甚だ貧弱でありますが、殊更に諸君の注意を惹く爲めに大きな題を出した譯ではありませぬ。事實が實は貧弱なのでございます。羊頭を懸けて狗肉を賣らうと云ふ積りで題を命じたのではないことを特に御斷りいたして置きます。日本文化の支那に及ぼせる影響と云ひましても誠に詰まらぬ事柄を申すに過ぎませぬが、一面此題目を借りて支那國民性の一端をお話することが出來やうと思ひます。無論支那國民性を論ずる譯ではございませぬから全般には亘りませぬが、偶〻此題目を通じて支那國民性の一端を申して見たいと云ふ考も含んで居ります。

支那の文化或は思想と申しまするものには外國の影響と云ふものが隨分ある、支那人が自ら認めて居るよりは餘程多い、併しそれは問題外になりますから申しませぬが、唯一つ初に御承知を願ひ置きたいのは、支那の人が外國の學術、思想、文物、制度と云ふものに對する場合に必ず一つの主義があると云

ふことであります。卽ち大抵のものは自國にあると云ふ考が第一にあることであります。外國にある所のものは大抵支那其れ自身に既に其萠芽があると云ふことを考へて居る。萠芽も既に發育成長したものとの間には大なる相違がある譯ではございますけれども、支那人は若し萠芽が自分の國にあるとしますれば、他の國で十分に發育成長させたものでも、さう大層有難い、大に研究しなければならぬ値打のあるものだとは考へない傾きがあります。日本の漢學者にもさう云ふ風の思想の人が隨分ありました、今は大抵無くなつたやうですが。最近の例を申しますと、明治三十五年北京に新たに大學堂を興すといふ議が決しまして、其大學堂の敎頭となるべき所の吳汝綸と云ふ者が學制取調の爲めに日本に派遣された其時日本の漢學者で大分吳汝綸と話をした人もありますが、其中に、一體何の必要があつて支那が外國のことを學ぶかと云ふ議論を吹掛けた人があります。支那には大抵なものはあるではないか、何も今日改まつて範を外國に採る必要はなからうと云ふことを頻りに言つた人がある。そんなことは日本人から言はぬでも支那人の疾うに考へて居つたことであります。例へば物理學と云ふものが西洋では大層發達して居るが、光學の原理は墨子の書にある。卽ち墨子の書に經上下二篇經說上下二篇がありまして、其中に光學に關したことが一二箇條あります。又同書に一二幾何學の原理も見える、そこで西洋の幾何も物理學も不要なりと爲すのである、此んなことは支那人の方が早く言つて居る、その支那人が今我を折つて西洋の事を學ばうといふのに日本の漢學者が此樣の議論を持つて行つて反つて彼に輕蔑されたので

あつた、兎に角支那人は自尊心も強いし文明も古いゆゑ、東西洋の學術制度などを自國のものに引き當てゝ言ふことが一般の傾向である、

更に別な方面で例を擧げまするとと、清朝の末年將來立憲制にしなければならぬと云ふ說が起り、いろ〳〵議論はありましたが、結局立憲制にしなければならぬと云ふことに極まつた、此く決するに至つた原因は種種ありましたが、一つは日露戰爭と云ふものが非常なる刺激になつたのである。無論支那人は始めは日本が敗れるだらうと見て居つた。所が豈に圖らんや皇軍連戰連勝と云ふ勢であつた、そこで支那人間に其原因が種々研究されましたが、結局日露勝敗の別れる所は唯、政體の關係であるといふことに歸着した。卽ち日本は立憲政治である、露西亞は專制政治である。專制政治は少數の人が己れの意を以て政を行ひ、國民の心を以て心としないから、上の人の爲す所國民が必ず贊成すると云ふ譯に行かぬ。隨て上下一致と云ふことが出來ない。立憲政治は之に反して上下一致の結果を持來す。上下一致したものが上下一致せざるものを擊つのであるから日本の勝つのは當然であると云ふ決論を作つた。其決論が支那の將來に對する一つの敎訓となつて、支那も愈〻立憲政治を採るべく將來方針を定めた、それに就ては無論憲法を制定し、國會を設けるといふ問題が伴つて來る。所で支那人は往往憲法は昔支那にあつたと云つた、成る程憲と云ふ字は有り、又憲法也といふ語もあつた。然しそれが東西各國で今日言ふところの憲法と同じものが有つたといふ證據にはならぬ。又國會と云ふものも支那に昔あつたと言ふ論者が

多く有つた、周禮と云ふ書物を見ますと、天・地・春・夏・秋・冬と云ふ六官に分けてある其中で秋官には司法事務のことが主として書いてあります。其秋官の長を大司寇といひ、次官を小司寇と云ふ。而して其小司寇と云ふ者の職務を見ますと三詢の法と申すのがあります。三詢とは三つの事柄に就て諮詢すると云ふのです。三つの事柄と申しますのは、一は國遷卽ち國都を現在の處より他處に遷すと云ふ場合に諮詢する。一は國危、卽ち外國から攻められるとか、何か國の危急なる場合に處置の方法に就いて諮詢する。もう一つは君を立つる事を諮詢する。多分是れは天子が崩くなられて跡繼がないと云ふやうな場合に相談するのでありませう、兎に角さう云ふ三詢の法と云ふのがあります。それは誰に諮詢するかと云ふと、役人を悉く集めますることは勿論でありますが、其外に人民を集めるのです。さうして役人を何所に坐る、人民は何所に坐ると云ふことまで小司寇の職に詳しく書いてあります、そこでそれは唯周禮に理想としてさう云ふ明文があるだけで、實際には行はれたことはないであらうと疑ふ人も有りませうが、左傳で見ますると實際に行はれた形跡が見える、周の王室の方で行はれた例は少いやうでありますが、諸侯の中には反つて多くさう云ふ例が見えます。又ずつと古い處へ遡りますと、殷の盤庚が都を遷す時に人民を集めて都を遷すの必要を說いて居る。書經の中に盤庚と云ふ篇がそれであります。韓退之は盤庚は讀み難いと云つて居るが、成るほど妙な言葉を使つてあります。是れは人民に話すのであるから當時の俗語を用ひたものであらう。若し雅言であればもう少し解り易い譯でありますが、兎に角人民

に向つて都を遷すの必要を説いて聞かして居る。諮詢と云ふより寧ろ説諭である、諄々乎として都を遷す必要を説明して居る。卽ち唯今の都では大分風俗が頽壞し人心が荒廢して居る、斯の如き有樣では遂に國が亡びる故に、新しい所へ都を遷して人心を一新しなければならぬと云ふことを説諭して居る。又周の先祖もさう云ふことをやつて居ります。孟子にありますが、周の先祖の古公亶父(後に太王と諡す)と云ふ人が戎狄に苦められた場合に、人民を集めて土地と云ふものは人民を養ふ所以のものである。今戎狄の欲する所のものは土地である。仁者は民を養ふ所以のものを以て民を害せず、自分は今此地を去る。併しお前達はよく戈狄に事へれば戎狄亦汝の君であるから何も君なきことを憂ふるに及ばぬと曰つて、人民を殘して去らうとした。所が、人民が、是れ仁人なり失ふ可からずと曰つて、老人の手を引き子供を背負ふて皆お供をして遂に岐山の下まで來たと云ふことが書いてある。此等は國の危き場合に人民に説諭した例と云つて宜いでありませう。それから君を立つる場合の例は、左傳に一つ見えて居る。さう云ふ風に、兎に角人民を集めて相談したとか説諭したとか云ふ實例はある、周禮の規定は卽ちそれでありませう。さうすると是れは一種の國會である、たゞ常設ではない。臨時のものであつただけのことだ。

そこで支那には古から國會があつた憲法もあつた。今日國會を造るとか或は憲法を制定すると云つても、歐羅巴或は日本などでやつて居るものを學ぶのではない。自分の國に元有つたものを復するのだと

考へる、是れは方便としては極めて宜い。外國より新たに持つて來ると云つたら或は反對する者もありませうが、元自分の國にも斯う云ふものがあつたのであるが、其れを今舊に復する、それは先づ西洋或は日本などでやつて居る所を參酌して、民情に適し國體に適するものを拵へると云ふやうに言へば、人に勸める方便としては大層宜しい。然し始終さう云ふ頭腦(アタマ)で、何とか言つても、ナーニ、そんなものは元自分の國に有つた、又現に自分の國にはあると云ふやうに考へるといふことは、研究上には大なる妨害となる、支那人が外國の學術、思想、文物、制度を研究する上に於て大層妨害になるものは此御自慢であると思ふ。物理學とか或は幾何學とかが墨子に少しばかりエレメンツがあると云ふのでそれで宜いと云ふならば、別に西洋の進んだものを研究しなくても宜いと云ふ考が起る。又國會とか憲法と云ふものは形が遺つて居らないから已むを得ず東西洋のものを研究しなければなるまいが、兎に角自分の國に元有つたものと似て居ると云ふことを直ぐ考へる。そこで假令似て居る處があつても亦大變違ふ處もありはしないか、こちらのは芽である、向ふのは成長した木である、芽は卽ち木では無いと云ふことを考へないで、芽が有る以上は強て木を研究しなくても宜しい、と考へる弊があるやうに思ふ。早合點する氣味が大分支那人には見える。

御承知の通り、西洋の宗教學術等が支那に這入つたことは可也古いことであります。近いところで申しても明の頃に利瑪竇と云ふ人が歐洲から布教に行つて色色の品物なども支那に入れたのです。洋琴と

申して、西洋では今日では博物館あたりに行つて見るより外に見られないピアノの極く簡單なものを支那では彈いて居る。又自鳴鐘といふゼンマイ卷きの時計も持つて參つた、油畫も多少持つて行つて居ります。今日の支那の繪畫の上には大した影響はないやうでありますが、一時は多少の影響を與へたらしい。そんな風にいろ〳〵支那に這入つて居りますけれども、學問と云ふ側で申すと割合に這入つたものが少い。第一耶蘇教と云ふものが一寸支那には入らぬものである。中流以上の人は到底耳を傾けない。下等の者が聽くのみである。下等の者が耳を傾けると云ふのは何も耶蘇の教義に感心するからではない、他の理由に基くのであります。支那人は人が何等の報酬を求めずして他人の爲めに力を盡すと云ふことは有り得べからざることゝ考へて居る。支那人同士では確に何等の報酬を豫期しないで人の爲めに力を盡すと云ふことはない。人の爲めに力を致せば何かの形で報酬を豫期して居るのであります。そこで目本人などが親切に支那人の爲めに盡してやる場合にも、どうも其親切と云ふことが支那人には本當に感せられない。支那人の頭腦にはさう云ふものを理解することが出來ないのです。何か目的があるだらうあの親切は險呑である、あの親切を受けると何か後で祟りが來るだらうと疑つて掛かる傾きがある。或は日本で留學生などの世話をしても始終さう云ふ考を有つて居る。留學生の世話をして日本は金を儲けるといふ考を有つて居る。成程多少日本に金が落ちるから、結果は金が儲かることになるかも知れぬがあたまから金を儲けるといふ考で世話をすると云ふ風に取つて居る、それでありますから、嘗て支那の

留學生が澤山來て居る時分に、日本の一流とも言ふべき人が留學生の世話をして居つたが皆蔭で儲けると支那人から言はれました。毎月若干の金を學校に納めるけれども、食はせる物が何程、洗濯や入浴が何程と勘定して見ると差引幾らは管理者が儲けて居ると云ふことを言つたものである、此計算には家屋の賃貸料だとか教員の手當だとか云ふものは入れないで、自分の身に直接掛かつて居るものだけで勘定して居る。日本政府が世話をしても日本政府がアタマを刎ねるやうに思つて居る。個人などは無論初から金儲けの爲めに世話をして居るのだと考へて居る。どうも親切に人の世話をしての何等報酬をも豫期しないと云ふことは人情として有り得べからざるものと考へて居る。さう云ふ考であるから、外國人が布教するといふことは支那人には到底理解出來ない。人に勸めて善を爲さしめるのであるから、國から申せば布教と云ふことは惡いことではないと云ふので許しはしたが、此方から賴みもしないのに千里の波濤を蹴破つて外國まで來て、人に善を爲すことを勸めるといふことは、到底人情として爲すべからざることゝ考へる。何か是れには目的があるだらうと疑ふ、不幸にして支那人の疑を事實が證明する。即ち宣教師の後に商人が附いて行く。其後に軍艦が附いて行く。さうして宣教師を何うとかしたと云へば賠償金を取る。土地を取るとなる。そこで成程此が爲めに宣教師が來るのだと斯うなつて來る。己れの國を取るために來るのであると云ふことになる。さう云ふ譯でありまして、事實が不幸にも疑を確めたりして、中流以上の人は到底耶蘇教に這入らない。又祖先崇拜と云ふことが耶蘇教と相容れぬと云ふ處

からも斷じて這入らない。然るに中以下の人は外國人の保護に依て己れての生命財産を安全にしやうと云ふので耶蘇教に這入る、中以上の者であれば、或は學位或は官位がある。其學位官位と云ふものが其人の生命財産を保護するから、別に外國人の助けに依つて生命財産を保護する必要はない。支那人は非常に苦んで試驗を受けるが、何も試驗を受けたから必ず役人になると云ふのではない。試驗には及第して役人にならない者もある又なれない者も少くない。六十七十になつて及第する者もあるのだから、斯う云ふ人は所謂日暮れて道遠しで、役人にはなる時がない。そこで試驗に及第した丈で直ぐに國へ歸つて居る者も隨分有る。然らば何の爲めに試驗を受けるかと云へば、學位さへ有つて居れば役人と雖も容易に其人の身體に手を付けられない。又租稅の如きも學位があるから租稅を免るゝと云ふことは出來ないが、賦役と云ふ非常に怖ろしいものがある。租稅以上に怖ろしい。租稅は一定の率が定まつて居るが賦役と云ふものは標準がない、殆ど地方官の考次第で何うにもなる。酷く當てゝ苦しめてやらうと思へば隨分苦しめることが出來る。所で學位を得ると其賦役を免せられる。是れは本と書物を讀んで居る者は貧乏人が多いと云ふので、貧乏人を保護すると云ふ所から、學位を得ると賦役を免せられるのである。それから何か事件があつて裁判所に出ると、普通の人間は裁判官の前に跪かなければならない。罪人であつても罪人でなくても其れは頓着しない。裁判官は椅子に控へて居つて、取調を受ける者は其前に跪く。非常な懸隔をして訊問等をする。所が學位があると其場合に跪くと云ふことを免せられる。役人の

前に出て腰を掛けて話す。對等で話が出來る。是れ亦己れの生命財産を保護する上に非常に便利であるさう云ふことで學位或は官位と云ふものを有つて居れば官吏の誅求と云ふものに對して生命財産を保護することが出來る。其爲に骨を折つて試驗を受けるのであります。そこで中流以上の人で學位なり官位なりを有つて居る者は外國人などの保護を仰ぐ必要はない。不幸にして下層の者であつて學位もなければ官位もない者は何か己れを保護して呉れる者が欲しい。そこで耶蘇教に這入つて宣教師の力を借りて自分の生命財産を保護して貰はうと云ふことから、祖先崇拜の習慣と矛盾してもそんなことには頓着しないで這入ることになつたのである、又宣教師も、ついさう云ふ譯であるから、已むを得ずと申しますが、不知不識と申しますか、信徒と云ふものを保護するので、何か自分の信徒と外の者と裁判事件でもあれば、直ぐに宣教師が出て行つて、あれは理窟があるから勝たして呉れと言つて辯護する處から、事實外國人の宣教師に依つて己れの生命財産が保護されると云ふことになつた。彼の義和團の事件などの生じたのも一つはそんなことが原因であつた樣であります。さう云ふ譯でありまして、耶蘇教と云ふものが下層の方に這入り中流以上には這入らない。明末に大學士尚書まで進んだ人に徐光啓と云ふ人があります。あゝいふのは支那の歴史には後にもない前にもない、現に義和團事件の騷擾の時に數千人の耶蘇の教民を我我が引き受けて保護しましたが、其中で、日本で云へば高等官四等位の家の人が一家有つたのみで、他は皆下流の者でありました。斯う云ふことでも多少分ると思ひます。

さう云ふ譯でありまして、耶蘇教が這入つた所で、宣教師の持つて參りました所の樂器とか或は油畫と云ふものが多少支那の音樂とか繪畫とかに影響を與へたことはありませうが、宗教とか哲學とかの方面に影響を與へたと云ふことは殆どない、唯、天文學と云ふものゝ影響はありました。支那の欽天監で日蝕を觀測した處が誤つて居つた。其誤りを宣教師から指摘されたことがある。是れは實際日蝕があれば分ることであるから愈、日蝕の時に當つて果して欽天監の役人の觀測が誤つて居つた。此點に於ては支那人一言もなかつた。それから北京の天文臺に外國人を是非共一人置くと云ふことになつた。此等は學術方面に對する影響でありませう。隨て數學の影響は多少あつたが、宗教又は哲學と云ふ如き精神上の學問には殆ど影響がなかつたやうであります。畢竟支那人が研究しないから影響を受け樣がなかつたのでございませう。

其後支那人が大に感じましたのは、彼の英佛聯合軍が北京を陷れました一件であります。(一八六〇年)其時には支那人は大に驚いた。兎に角北京まで這入つて來て遂に支那人の最も忌み國の耻とする城下の盟を爲したから、餘程痛切に感じた。殊に朝廷に於ても國辱と云ふことに就ては非常に感じて居る。其際どれほどの感じを與へたかと申しますると、是れも先づ私の批評する所では割合に淺薄なものであります。殆ど皮相であります。卽ち外國人と云ふものは非常に偉いと云ふことを感じた。但何が偉いか。彼れの武器が強いと云ふことを感じたのであります。艦などは成程良いものを有つて居る。又大砲も鐵

砲も支那のものより良い。大砲などは明末に宣教師が支那政府から頼まれて鑄ました所のものが今も殘つて居るが、さう云ふものより尙ほ優れて居る。兎に角支那にある所の大砲とか鐵砲と云ふものは到底西洋のものに向つては當ることが出來ない。彼れの武器の精英なることが我をして城下の盟を爲さしめた原因であると考へた。こそで彼れの武器の長處を取ることをしなければならぬと云ふので、初めて西洋に留學生を出すことになつた。西洋に留學生を出すには言語を覺えさせる必要であるから、初めて外國語を敎へる學校が出來た。其處で英語などを習はせて、俊秀の子弟を選拔して外國に送つて武器のことを學ばせることにした。

其後日清戰爭となりましたが、是れも貧弱と侮つて居た日本に破られたのであるから幾らかの感じを與へて居る、一時は役人などは非常に奮起した。既に其時「普天忠憤集」と云ふ書が出來ましたが、是れは日清戰爭後役人などの悲憤慷慨の文を集めたのであります。悲憤慷慨と云つても徒らに切齒扼腕したのではなく、何とかして日本に負けた耻を雪ぐといふ計畫を立てなければならぬ、其れにはいろ〳〵國政の改良をしなければならぬと云ふので畫策を吐露したものであつた。英佛聯合軍に破られた時よりも少し感じが强かつた。國政の改良、敎育の改良と云ふ處まで進んで參つたのでありますから餘程の感じを與へたのでありませう。併しそれも一時のことでありまして、大學を造ると云ふ議まで起りまして、大學の型の樣なものは出來て多少緒に付いたのが直きに形無しになつた。それから例の義和團の事實が

起つたのであります、此事變で又餘程感じたやうであります。一回々々と感じが強くなつたのでありますが、兎に角義和團の事變で上下共に非常に奮起したと云ふ狀態であります。日清戰爭の頃には、少し田舍の方へ行きますと、日本と戰爭をして居るさうだ位しか知らなかつたらしい。無論負けて居ると云ふことは知らなかつたらしい。又支那は國を擧げて戰つたのではないから、敗れたと云つても田舍の隅々まで行亘つて、日本に負けた耻辱を雪かなければならぬと云ふまでの感じを起さなかつたのであります。併し北清事變の頃には既に電信と云ふものも大分擴がつて居り、新聞も出來て居つた。新聞は西太后の政略で一寸抑へられては居りましたが、兎に角出來て居つた。交通も大分開けて居つた。いろ〳〵噂なり話なりの傳播する機會があつたから餘程感じが強くなつた。あの時分に朝野共に奮起して、支那の將來の開拓を行はうと云ふので種々なる案が立てられたのであります。教育の刷新——刷新と云ふより寧ろ新に教育を起すと云ふことが始まりました。新聞なども著しく殖えて參つたと云ふやうなことで餘程面目が變はつた。其後又日露戰爭と云ふものが非常なる刺激を與へて遂に立憲政治にすると云ふまでに進んだのであります。

さう云ふ風に大分進んで參りましたが、もう一息深く立入つて外國の強い理由は何處にあるかと云ふことを十分に研究すると云ふ念は出て來ない樣であります。或は惡く言つたら、さう云ふ研究をする能力がないと言へるかも知れませぬが、兎も角も支那人は根柢まで入り込んで研究をすると云ふ考にならし

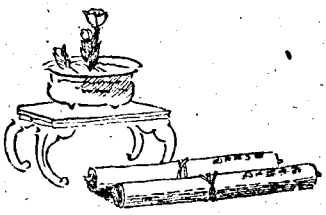
ぬのであります。現に憲法政治を行はなければならぬと云ふことが極りました時にも、理由は前申しました様な理由でございますが、一つは之に依つて清朝を泰山の安に置くことが出來ると云つたのでございます。そこで其時分切りに申しましたのは、春秋尊王の大義と云ふものが日本に獨り行はれて居るから、憲法を制定するならば何うしても日本の憲法に倣はなければならぬと言ふことであつた、併し支那として憲法は日本に範を取ると云ふことを明言すれば、歐米の方から忽ち抗議を申込まれる。そこで成可く東西の例を研究して其長を取ると宣言して、日本及び歐米各國に皇族其他大臣を派遣して取調をさせたのであります。併し朝廷及政府當事者の方では、憲法は日本のを取ると云ふことに腹は極まつて居つて、唯、申譯に人を出したと云ふのであります。だから憲法政治の結果が如何に國利民福の上に影響して居るか、憲法政治によりて國の繁榮と云ふことが如何程進んだかと云ふ樣な結果の方を調べさせたので憲法其者に就て根本的に研究をさせたのではない。伊藤公爵が歐羅巴で研究された樣な態度で研究したのではない。唯、漸くにして各國の憲法を調べたと云ふ名だけでありまして、其實は日本のものを其儘そつくり取らうと云ふ考であつたのであります。

さう云ふ譯でございましたから、隨て法律其他のものも亦皆日本のものを取つた方が都合が好いと云ふ考になつたのでございます。そこで頻りに留學生が日本に參るやうなことになり、又いろ〳〵のことを取調べに來る人が出來た、併し日本と支那とどれ程國體が違ふかなど云ふことは一向考へない。日本

に春秋尊王の大義と云ふものが行はれて居る。日本の憲法を移せば支那にも亦忽ちにして春秋尊王の大義が立つと云ふ考であつたらしい。どうも根本的の考が薄かつた、そこで憲法なり法律なり、凡てのもの皆日本の眞似をすると云ふことになりました。是れも實は支那人の心理を解剖して申しますれば、日本の憲法が一番宜いと云ふた所で、成程春秋尊王の大義の一事だけはさう考へたでございませうが、果して日本の憲法が世界無比であると云ふことを深く感じたか何うかと云ふことは別問題であります。又日本の法律が最も進んで居ると云ふことを固く信じてそれを採ることになつたか何うかは疑問であります。第一支那人から申しますれば、日本の文明と云ふものは到底歐米に及ぶものではない、確に一歩は下がつて居ると考へて居た。先刻申した吳汝綸と云ふ人が東京に來て左樣に明言した。又日本で誰も吳汝綸に向つて然うでないと云ふことを說破した人はなかつた。卽ち吳は次の如きことを東京で公に言つたのであります。今私の國で敎育に於て日本を手本としますのは是れは當分でございます。暫く日本に範を取り、他日私の國がもう少し進みましたならば直ちに歐米を手本にします。つまり私の國は日本から見ても四十年も後れて居る。其四十年後れて居る支那が一足飛に歐米の眞似をすることは出來ない。子供がいきなり大人の眞似をすることは出來ない。今は私の國に較べれば先づ一日の長なる日本である自分の兄位に當る日本の眞似をする。軈て日本位になつたら直に歐米の眞似をする、と。斯う云ふやうなことを公に言つたのであります。暫くといふことを言つて居る。これに對して誰も其れは間違つて居

るといふことを言つた人が無かつた樣である、それが獨り吳汝綸の考とは見られない。つまり兩宮西安に蒙塵せられまして、將來支那の富强を圖るには凡て新い仕事を起さなければならぬ。それには第一人材を養成する所の教育からしなければならぬと云ふことになつた。其時當分日本を手本とすると云ふことになつた。無論是れは朝野の思想であつたのでございます。

そこで斯う云ふことがあります。是れが支那人の妙な處でありまして、日本の眞似をすると云つても明治三十五年の日本の眞似は出來ない。今日は進步した日本である、此進步した日本の眞似を今直ぐに支那がすることは出來ない、須らく明治初年の日本を學ぶ可しと云ふことになつた。そこで吳汝綸が文部省に參つても、どうか明治初年に制定された學制を一部吳れと言ひ、或は明治初年に外國人を雇つた契約の寫を吳れと言つた。何でも明治初年の日本の通りにやらうとした。そこで十年間かそこらで明治三十五年位の程度に漕付けて、それから今度は歐米のお世話にならうと云ふ考であつたらしい。つまり日本は歐米には及ばない、少くも一步は後れて居る、富の程度から言つても甚だ貧弱であると云ふやうに考へたので、暫く日本を學ぶと云ふことになつた。それに法律などは日本の法律は歐米の長を採り粹を拔いたものである、而も其れを日本化したものである、自分の方に採るのは都合が好い。いきなり歐米の眞似をするよりも兎に角日本の眞似をしやうと云ふので、憲法も日本の通り、其他のものも日本の通りと云ふやうなことでいろ〳〵やつて參つたのであります。

さう云ふことになりましたので、假令其考の處は何うでありましても、結果の上に現れましたことは日本に範を取ると云ふことになりまして、日本の法律は片ッ端から譯される。教育制度の如きは殆ど日本のものを直譯したと云ふやうなことであつた。同時に日本に留學生を澤山寄來して、其れが歸つてから仕事をする。そこで日本の言葉と云ふものが甚だしく支那に入込んだ。私が今夕申上げます要點はこれからでございます。前に申上げましたやうに支那では千八百六十年に英佛聯合軍に破られてから外國に留學生を出した。是れは可なりの數を出して居る樣でありますが、其等の人々が歸つて參りまして學問などをどれ程支那に傳へたかと云ふと、格別見るべきものがございませぬ。たゞ今でも生きて居る嚴復と云ふ人があります。英吉利に留學しましたが、此人がいろ〳〵飜譯物をやつた。ミルのシステム、オヴ、ロヂックとか或はアダム、スミスのウェルス、オヴ、ネーションスとか其他いろ〳〵譯して居る。之を譯しますのに、從來譯語が出來て居りませぬから殆ど自分の頭腦で譯語を作つて參つたのです、それには成可く支那の言葉を使はうと云ふのでありませうが、或は論理學に名學と云ふ名を附けた。或は進化論を譯した時に、「進化」と云ふ文字を日本で使つて居ることを多分知らなかつたのでありませうが、自分で譯語を考へて天演論と云ふ名を附けたそれから自然淘汰を物競と云ふ風に譯した。さう云ふ風に新に考へて譯語を作つたのであります。其處へ日本からして法律上其他の言葉が皆入込んで參りました。日本に留學していろ〳〵筆記などした。それを支那へ歸つてから自分の頭腦(アタマ)で支那風の言葉に直さうとす

ると大變な仕事であるから、日本で學んだ言葉をそつくり使つた。物理でも化學でも其他のものに於て皆使つた。唯、前から宣教師の譯した化學の元素の名などは今日でも古いのを使つて居りますが、其他は日本のを其儘持つて行つて使つて居る。さうなると嚴復が折角骨折つて拵へた譯語が用ひられなくなつた。つまり其方が分りにくいと云ふのです。分りにくいと申せばどつちも分りにくいかも知れぬが多數の人が口にして耳慣れて居るから其方が分りよいので、つまり日本の譯語が使はれて居る。嚴復も遂に兜を脱いで日本の譯語を使ふより外仕方がないと云ふことになりました。（未完）